

吾亦紅

家内に茶の湯を教わりにきていた Tさんは、時折、お供えにと花を提げお参りに立ち寄ってくださる。その Tさんから「あしたサーカスにご一緒しませんか？」と誘いがかかった。サーカスなんて何十年ぶりだろう。少年みたいに心が弾んだ。

内灘の一角に設営されたサーカスの尖塔せんとうのついたテントに着いた。指定席に座ると、太ったピエロが場内をわかせ、観客がくつろぐのを見届けて演目が始まるどころ。息もつがせぬ曲芸の数々。ドッグシヨウの妙。空中ぶらんこで終わるまでの二時間は、夢のように過ぎた。

くらしの作文

「道の駅」でお食事をとろう。Tさん出費の一部でもと包んだのを固辞されて、甘えることにした。河北潟放水路に面した道の駅一帯、「恋人の聖地」だそうだな。「私ら二人、周囲からどう思われるかね」。うっかり愚問を呈してすぐ悔いた。「父娘でしようね」。テーブルの片ひじがずっこけたが、それでいいのだ。

帰り際、家内にと仏花を選んで渡してくれる。花の芯に立つ吾亦紅われもこうを指さして「先生がお好きな花でした」と言い添えた。私の心に吾亦紅の紅と、Tさんへの感謝の紅と重なり、思い出に残る一日となった。